

時が経つのも速いもので、6月になり衣替え、目に映る景色がぱっと明るくなりました。暦の上では、5月5日が立夏であり、とうに夏になっています。ですから5月に行われた大相撲も、夏場所というのです。先月、改めて紹介した照ノ富士、優勝しました。新聞記事にこう書いてありました。

「照ノ富士が新大関昇進を決めたのは、もう6年も前の夏場所だ。両ひざのけがや内臓疾患で序二段まで落ちながら、元の地位に返り咲いた。29歳で看板力士として初めて抱いた賜杯は成熟した強さの証しだ。…花道ではタオルで顔を押しさえ、感無量の表情を浮かべた。自身4度目で初めて決定戦を制した安堵かと思われたが、（独走状態であったが、一転、2連敗で勝ち数が貴景勝と並び優勝決定戦になったのです。）『負けている以上は、もっと勉強しないといけないと思った。もっと頑張らないと』。喜びよりも反省が出るのが成長の要因だろう」。照ノ富士の親方である元横綱旭富士、伊勢ヶ濱親方が来校した縁で注目するようになりましたが、次は、ぜひ横綱になってほしいものです。

さて、今、1年生は一人一台タブレット型 PC、iPad を持って授業や探究学習に臨んでいますが、iPhone、iPadなどを世に送り出したアップル社の創業者で、CEO（経営最高責任者）であったスティーブ・ジョブズ氏のことは、知っている人も多いと思います。彼の言葉として有名なものが“Stay hungry Stay foolish”、「ハングリーであれ。愚か者であれ」、いろいろな解釈があると思いますが、「物事に対して食欲になり、夢中になって取り組め」という意味だと思います。しかし、これは彼自身の言葉ではなく、雑誌に書かれてあった言葉でした。これに彼がとても感銘を受けたのです。まさに自分の生き方を示してくれているのでしょう。実は、本校で使っていた英語の教科書「CROWN」に、ジョブズがスタンフォード大学の卒業式に招かれた時のスピーチが載っていました。そのスピーチでは、彼が生きてきた経験から3つの話をしていました。

今日は、そのうちの1つを紹介します。それは、“connecting the dots”です。「点をつなげる」「点と点を結ぶ」という意味になります。

彼は、経済的な理由もあって大学を辞めていたのですが、面白そうに思えたカリグラフィーの授業に潜り込みました。カリグラフィーは書道の訳にも使われますが、言ってみれば文字のデザインです。皆さんもパソコンに何種類ものフォントあるのを知っているでしょう。彼としては、当時、これが何かの役に立つとは考えもしなかったのですが、10年後、最初のマッキントッシュ（コンピューター）を設計していた時、カリグラフィーの知識が急に蘇ってきて、その知識のすべてを注ぎ込みました。そして、美しいフォントを持つ最初のコンピューターが誕生したのです。もしあの講義に出ていなかったら、もし夢中で学んでいなかったら、コンピューターには多様なフォントや字間調整機能も入っていなかったのです。振り返ると、彼は、結果的に将来役に立つことを学んでいたのです。

そう言えば、私も極めて小さなことなのですが、新任の時のことを少し話します。もう40年前のことです。毎月学校で発行している「校報」があります。その編集の仕事に就いた時の話です。その時の編集長がとても厳しい方で、原稿の締め切り近くなると一週間は、皆で集まり、一つの記事や写真、レイアウトについて、編集長が納得するまでやり直し、なかなかOKが出ない。その編集作業は、終了が夜遅くなることもたびたびありまし

た。校正を少なくとも5回はやりました。それも加えると月に半分くらいは遅くまでこの「校報」の仕事をしていたのです。大学時代、英字新聞部にいて、1人一晩400円で六畳一間の貸部屋に7、8人が集まり、徹夜で編集をやっていましたので、こういう状況はまだ少々慣れてはいました。しかし、教師としてこの学校に勤めているわけで、授業が当然一番大切なわけです。そのため朝の4時くらいに起きては少なくとも毎日2時間は教材研究をし、授業案を練るといふ毎日、そうした「校報」の仕事がある時もその習慣を止めるわけにはいきません。

そうして2か月が経ったくらいの時、私に記事を書く仕事が来ました。さっと書いて提出しました。それなりに自信はありました。ところが、ボツになったどころか、その記事について叱られました。「教育が分かってない」と。その時、他の編集委員の先生方が決してその記事は悪くない、ましてや新人でもあるのに、そんな言い方をするのだと反発し、私の記事で大変なことになってしまったのです。そこで私は「自分は大丈夫ですから」と中に入って収めようとしたのですが、今までの働き方の不満も爆発し、大げんかになってしまったのです。それでも何とかようやく収まり、「帰ろう」となったのが夜中でした。もちろん普通に次の日も仕事があります。後になって自分で気づきました。なぜ、自分の記事がダメだったか。まだ若く、なまじ新聞部、そこからは大手新聞社や出版社に進む人たちが先輩や同期が多くいて、その中でやってきたという驕った気持ちもあったのでしょう。上から目線で書かれた鼻につくような文章だったのです。

編集委員の先生方には、新人の自分のことで、騒ぎになって申し訳ないと思うのと同時に、ここまで熱くしてくれたことに対してありがたいことだとも思ったのです。取りあえず今やれることをしっかりやろうと心に誓いました。そこで、まずは校正に全力で取り組みました。現在のようにコンピューターのワープロ機能や編集機能などなく、当時は手書きの原稿、レイアウトを見て職人さんが、一文字一文字活字を拾って文を作って版を作ったのです。信じられないほど気の遠くなるような作業です。ピンセットのような物で何千とある5ミリ程度の鉛の活字を選択して並べるのです。そのため、たまに活字が逆になっていたり、活字がすり減っていたりすることもある。文章の流れや文法や誤字脱字だけでなく、そこも見なくてははいけません。現在の校正よりも何倍も神経と労力を使う作業でした。ただし、ここでも大学時代もアルファベット一文字一文字を見ていたという経験が生きてきます。全神経を集中させながら何時間もかけて一文字一文字見ていきました。家にも持ち帰って何回も見直していました。誰よりも赤ペンで原稿用紙を真っ赤にしていた記憶があります。そのうち「よく、この間違いを見つけたな」と誉められるようになってきました。

そうして、また再び記事を書けという命令が下りました。今度はどうかというと、1語も直されることなく、「校報」に載ったのです。考えてみると校正の作業を行っている中で、何度も何度も文章を読み返しているうちに、その「校報」の文章が自分の中に染みついていました。当時の校長であった佐々木周二先生の式辞や講話を繰り返し、真剣に読んでいたうちにそれが頭に入っていた、また、行事の記事を読んでいると、その行事の意味とかを考えていた、ということだったと思います。そうして自然に本校の教育について学んでいたのです。

さらに、この時の経験は、成績通知表や調査書、推薦書を書く上で、そして学校の書類

をチェックしなければならぬ立場になった時、とても役に立ちました。その後、初代学校長佐々木周二先生の言葉と文章を集めた本、「私学の春秋」を始め、今は「飛翔」という名ですが、当時「躍進」というアルバム、先生方の文章を載せた「太平台春秋」という冊子（これは1巻から22巻まで関わりました。）など、学校の発行事が必ず回ってききましたが、やり甲斐を持って、取り組んでいたと思います。

考えてみると、小学5年生から6年生にかけ、1年間で500枚以上の旅行記などの作文を書いたことも、大学時代に英字新聞部に所属していたことも、つながっていたのです。ジョブズは言っています。「将来をあらかじめ見据えて、点と点をつなぎ合わせることはできない。できるのは後からつなぎ合わせることである。だから、我々は今やっていることが、いずれ人生のどこかでつながって実を結ぶだろうと信じるしかない。私はこのやり方で後悔したことはない。むしろ今になって大きな差をもたらしてくれたと思う」。

皆さんも、これから色々なことがあるであろう長い人生、一見、何の役に立つのだろうと思えるようなことでも一生懸命に取り組んでいけば、きっと将来何かにつながっていく、そして、そうやって人生の道は拓けるということを胸に刻んでおいて下さい。

最後にもう一つ、ジョブズには照ノ富士との共通点があります。それは、二人とも一度どん底まで落ちていることです。自宅のガレージで友人とコンピュータを作り、アップル社を20歳で創業、10年後には売上高20億ドル、社員数4000人を超える会社に成長させます。しかし、自ら招いた人と意見が合わず、何と自分で創業し、大きくした会社を首になるのです。ところが、彼はこう考えていました。「もう一度挑戦者になるという身軽さにとって代わった。人生で最も創造的な時期を迎えることができた」、そして、NeXTという会社とピクサーという会社を立ち上げるのです。（ピクサー社と言えば、「トイ・ストーリー」や「ファインディング・ニモ」を制作しました。）アップル社がその会社を買収し、結局はアップル社に復帰、CEOに返り咲いたのです。そして、2003年にiPhone、2010年にiPadの発表となるわけです。これは2つ目の話“love and loss”の中で語っていたことでした。大成する人の共通点の一つには、必ず大きな失敗、大きな挫折があり、そこから立ち直り、また、頑張るといふことがあるのです。皆さん、このこともしっかり覚えていて下さい。